九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

天草諸方言のアクセント資料の提示と新しいアプローチに基づいた西南部九州諸方言の系統分析の試み

五十嵐，陽介
広島大学

松浦，年男
北星学園大学

https://doi.org/10.15017/1518716

出版情報：九州大学言語学論集. 35, pp.71-102, 2015. 九州大学大学院人文科学研究院言語学研究室
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

天草諸方言のアクセント資料の提示と新しいアプローチに基づいた西南部九州諸方言の系統分析の試み

五十嵐 陽介[*]・松浦 年男[**]
([*]広島大学・[**]北星学園大学)
[*]igarashi@hiroshima-u.ac.jp, [**]yearman@kyudai.jp

キーワード：アクセント，天草諸方言，類別語彙，西南部九州諸方言，系統論

1. はじめに

本稿の目的は以下の 3 点に要約できる。第 1 に，天草諸島（主に天草下島）の 7 地点（崎津，今富，本渡，大島子，深海，牛深，下須島）で我々が行ったアクセント調査の結果に基づいて，天草諸方言の名詞アクセント資料を提供することである。第 2 に，アクセント体系に基づいた日本語諸方言の系統研究のための新しいアプローチを提案することである。第 3 に，我々の提案するアプローチを用いて天草諸方言のアクセント資料を分析し，西南部九州諸方言における天草諸方言の系統的位置を検討することである。

天草諸島は熊本県の西部に位置する島々で，天草上島（かみしま）と天草下島（しもしま）を中心に他に複数の小さな島が分布している。かつては多くの市町村に分かれていたが，いわゆる平成の大合併により，現在は天草下島の大部分と上島の西側が天草市，天草上島の東側が上天草市，天草下島の一部が苓北町に属している。我々が調査を行った集落は全て天草市に属している。以後，天草諸島で話されている日本語の方言を「天草諸方言」[1]と呼ぶことにする。

---

[1] 天草諸方言の記述的研究としては九州方言学会(1969/1991)，藤原(1991)，真田(編)(2002)を挙げることができる。九州方言学会(1969/1991)では深海方言について音韻，アクセント，文法，語彙に関する調査が行なわれている。藤原(1991)では大江方言について，発音（ピッチの高低の記述を含む），文法事項，語彙が収録されており，比較的細かい表現の用法についても記されている。また，真田(編)(2002)では今富方言，崎津方言について，表現法（たとえば仮定，受身），待遇，用言の活用，助詞の調査

アクセントの観点からは，天草諸方言は「二型アクセント」体系を有するとされる（平山 1951，上村 1971）。二型アクセント体系とは，語の長さの増加に関わらずアクセント型の対立数が一定数（N）を超えない「N 型アクセント」体系の一種で，その対立数が 2 であるものである（上野 2012）。二型アクセント体系を有する九州の方言は，九州の西南部に局在しており，佐賀南部の方言，長崎県の一部の方言，熊本県の一部の方言，鹿児島県の大部分の方言，鹿児島県の離島（種子島や甑島など）の方言が含まれる（平山 1951）。これらは「西南部九州二型アクセント方言」と呼ばれることがあるが(木部 2000)，本稿ではこれを「西南部九州諸方言」と呼ぶことにする。

系統論の観点からは，天草諸方言はどのように日本語諸方言の中に位置づけられるのであろうか。伝統的な方言区画論に従えば，天草諸方言は肥筑方言のひとつをなす（東条 1954）。また，秋山(1983)による熊本県を単位とした分類によると，天草諸方言は八代郡や球磨郡の諸方言と同じ熊本南部方言に分類されるという。ただし，この種の方言の分類は，（際立った方言差を示す）言語的特徴の表面的な類似点･相違点に基づくものであり，系統的な分類ではない。第 2 節で詳述するように，系統的な分類（特に分岐学的手法に立脚した分類）は，方言群が共有する言語特徴が改新（innovation）であるか保持（retention）であるかを峻別した上で，共通の改新にのみ基づいて行わなければならない。

日本語学においても，共通の改新に基づく諸方言の系統研究が行われてきたが，その際，証拠として用いられる言語特徴は，もっぱらアクセント体系に関するものであった（金田一 1973，1974）。第 2 節で論じるように，アクセント体系からの証拠に基づく系統研究で用いられてきた従来の手法には，とりわけ西南部九州諸方言に適用するには，限界がある。

以後，第 2 節では，アクセント体系の系統論に関するこれまでの研究を再検討したのち，アクセント体系に基づいて諸方言の系統関係を確立するための新しいアプローチを提案する。第 3 節と第 4 節では我々が行った天草諸方言のアクセント調査の結果を報告し，同方言のアクセント資料を提示する。第 5 節では我々の提案するアプローチを用いて，天草諸方言の資料およびその他の西南部九州諸方言の資料を分析し，天草諸方言がどのように系統的に位置づけられるかを検討する。第 6 節では本稿の議論を要約し，結論を述べる。

結果が記されている。

2. アクセント体系に基づいた系統論への新しいアプローチ

2.1. 概要

本稿の目的の 1 つは，アクセント体系に基づいた日本語諸方言の系統研究のための新しいアプローチを提案することにある。従来の研究において「アクセントの系譜論」と呼ばれる，アクセント体系に基づく諸方言の系統研究は，日本語の方言研究において多くの成果を挙げてきた（徳川 1962, 奥村 1978; 崎村 2006）。しかしながら，従来の研究手法は，とりわけ西南部九州諸方言に適用するには，後に論じるような限界がある。本節では，従来の系統研究では十分に検討されてこなかった現象に着目して，この課題への新しいアプローチを提案する。本論文の第 3 節以降で我々が提示する天草諸方言の資料は，この新しいアプローチの有効性を検証するには，質・量ともに十分ではない。しかしながら，今後の更なる研究のために，アプローチの全体像を明らかにしておくことにも一定の意義があると思われる。

2.2. 類別語彙

アクセント体系に基づく日本語諸方言の系統研究では，伝統的に「類別語彙表」が用いられてきた。類別語彙とは，現代日本語諸方言の共通祖語に仮定される体系において，アクセント型によって区別される単語の集合である。類別語彙の概念は，服部四郎や E.D. Polivanov の一連の研究をもってその嚆矢とすることができるが，類別語彙表の形で初めて体系化したのは，金田一春彦である（金田一・和田 1955; 金田一 1974）。

類別語彙表において，それぞれのアクセント型によって区別される名詞の集合は「類」（第 1 類，第 2 類…）と呼ばれ，それぞれの類に所属する語は「類別語彙」と呼ばれる。類およびそれぞれの類のアクセント型は，現代の日本語諸方言，および『類聚名義抄』に代表される平安時代以降の文献資料におけるアクセント型の音対応（sound correspondence）に基づいて定義されている。すなわち類は，標準的な比較再建（comparative reconstruction）の手法を用いて定義されている。金田一によると，日本語諸方言の祖語には，1 拍名詞には 3 種類のアクセント型が，2 拍名詞には 5 種類のアクセント型が，3 拍名詞については 7 種類のアクセント型が区別されていたという。2 拍名詞の類と，それぞれのアクセント型（括弧内），そしてそれぞれの類に所属する語の例を(1)に示す。（以後 H は高い拍，L は低い拍，F は下降する拍，R は上昇する拍を表す。）

(1)　2 拍名詞の類とそれぞれに所属する語の例（所属語彙は松森他 2012 より）

a. 第 1 類（HH）：飴，牛，枝，顔，風，口，酒，竹，箱，鼻，水，道
b. 第 2 類（HL）：石，歌，音，紙，川，夏，橋，冬，町，村
c. 第 3 類（LL）：足，池，犬，馬，島，月，波，花，耳，山
d. 第 4 類（LH）：息，糸，海，帯，傘，空，箸，舟，松
e. 第 5 類（LF）：秋，汗，雨，桶，蔭，声，猿，鶴，窓

ただし，3 拍名詞の第 3 類（3 拍 3 類）は例外が多いことが知られており，研究者によっては認められないことがある。実際に，金田一(1974)では 3 拍 3 類が削除されている。本稿も 3 拍 3 類は認めない立場を取る。

ある方言において，ある類に属する語のアクセント型が，他の類に属する語のアクセント型と同一となり，したがってその方言における類の区別が消失する（アクセント型の対立数が減少する）ことがある。現代の日本語諸方言の大部分はこの通時的変化を経験していることが知られている（金田一 1974; 徳川 1962）。このような通時的変化は，日本語学では「類の統合」と呼ばれるが，より一般的に言えば，音素合流（phonemic merger）として知られる通時的変化のひとつに他ならない。類の統合は，ある音変化（sound change）が生じた場合，同一の環境に位置する同一の音は，その変化を例外なく被るという，言語一般に観察される特性の結果である。この特性は，比較言語学において「音韻法則に例外なし」というスローガンの形で知られるが（Osthoff and Brugmann 1878），日本語学においても，この規則的な音変化に起因する類の統合は，諸方言の系統関係の確立に中心的な役割を演じてきた。

例えば徳川（1962）によると，京都方言，東京方言，広島方言，大分方言，鹿児島方言は，2 拍名詞に関して，(2)のような類の統合を示す。ここでアラビア数字は名詞の拍数を表し，ピリオドは類の統合を，スラッシュは類の区別の保持を表す。

(2)　京都方言，東京方言，広島方言，大分方言，鹿児島方言の 2 拍名詞の類の統合

a. 京都方言　　II-1/2.3/4/5
b. 東京方言　　II-1/2.3/4.5
c. 広島方言　　II-1/2.3/4.5
d. 大分方言　　II-1.2/3/4.5

e. 鹿児島方言　　II-1.2/3.4.5

徳川（1962）は，このような類の統合に基づいて，日本語諸方言の系統樹を提案している。ここで利用される原理は，同一の類の統合を示す方言群は系統的な分類群をなすというものである。これは，ある改新（innovation）を共有している言語群は系統的な分類群をなすとする，比較言語学における最も重要な原理のひとつである。ここでの改新とは，祖先には存在しない特徴のことであり，祖先から継承された特徴である古形の保持（retention）と対立する。系統分類は，改新が共有されている事実に基づいて行うべきであり，祖先から継承された古形が共有されている事実は，系統分類に役に立たないとする見解は，言語学だけでなく生物学における系統研究でも標準的なものである（Atkinson & Gray 2005）[2]。

2.3. 類の統合に基づく系統論の限界

しかしながら，類の統合のみに基づいて方言の系統関係を確立することには限界がある。第 1 に，たとえある方言と別の方言が類の統合という改新を共有していたとしても，それらが同一の系統的分類群をなすと主張するためには，平行進化（parallel mutation）の可能性を，独立の証拠に基づいて，排除する必要があるからである。平行進化とは，異なる系統に属する言語それぞれにおいて，類似した変化が独立に生じることを指す。

例えば，東京方言と広島方言は，類の統合に関して同一（II-1/2.3/4.5）である。しかしながら先行研究の大部分では，類の統合を共有している事実のみに基づいて，東京方言と広島方言とが密接な親縁関係を有するとはみなさない。両方言が共有する類の統合という改新は，平行進化であるとみなすのが一般的である。徳川（1962）もまた，この改新を平行進化の結果であるとみなしているが，そのように主張する根拠は，主として両方言の地理的分布にある。地理的分布

---

[2] 改新と保持の区別は K. Brugmann によって 19 世紀末に初めて提案された。彼は，系統分類の基準は，祖先から継承された特徴の共有（shared retention）ではなく，共通の改新（shared innovation）に求めるべきであるとして，比較再建の手法を発展させた。共通の改新に基づく系統分類の手法は，20 世紀以降に生物学に取り入れられ，その後，計算アルゴリズムを応用した系統発生論（computational phylogenetics）が発展することになった。その結果，高度な計算を要する生物の系統解析（タンパク質のアミノ酸配列や遺伝子の塩基配列に基づく解析）が可能となっている。分子生物学を中心に発達した系統解析の手法は，近年，言語学に応用され成果を挙げている（Atkinson & Gray 2005; Bouckaert et al. 2012; Gray et al. 2003; Bryant et al. 2005; Lee & Hasegawa 2011; Pellard 2009）。

が適切な証拠であるか否かは別にして（これに関しては後に触れる），ある類の統合が平行進化であるか否かを判断するためには，このように，類の統合とは別の証拠が必要となる。

第 2 の限界は，ある方言群が類の統合を共有している場合は，それらの方言群の下位系統を確立することが不可能になるということにある。西南部九州諸方言は正にこの問題を抱えている。

西南部九州諸方言では，規則的な音変化の結果，アクセント型の対立数が 2 まで減少し，それにしたがって，祖語における類の大部分が統合していることが知られている（平山 1951; 上村 1971; 木部 2000; 上野 2006; Kubozono 2012; 松浦 2014）。西南部九州諸方言の類の統合のパタンは(3)のように表すことができる。括弧内は各類に所属する語のアクセント型（A 型と B 型）を表す。

(3) 西南部九州諸方言における類の統合

a. I-1.2 (A) / 3 (B)

b. II-1.2 (A) / 3.4.5 (B)

c. III-1.2 (A) / 4.5.6.7 (B)

すなわち，天草諸方言を含めすべての西南部九州諸方言は，類の統合という改新を共有している。

定説によれば，すべての西南部九州諸方言は，西南部九州諸方言のみを子孫とする共通の祖先に遡る（奥村 1978; 木部 2000, 上野 2012）。この共通の祖先を西南部九州祖語と呼ぶことにしよう。分岐学（cladistics）では，ある祖先とその子孫すべてを含む分類群を単系統群（monophyletic group）と呼ぶが，西南部九州諸方言は，(3)に示した類の統合という改新によって他から分岐する単系統群をなすということができる。

現在の西南部九州諸方言は，様々な改新によって，西南部九州祖語から分岐していったと考えられるが，その分岐の過程を，類の統合に基づいて明らかにすることは不可能である。系統発生の過程は，図 1 のように系統樹（phylogenetic tree）の形で表現することが一般的であるが，系統樹において，西南部九州祖語という節（node）から分岐する枝（branch）の樹形（topology）を明らかにするためには，類の統合以外の情報を利用する必要がある。

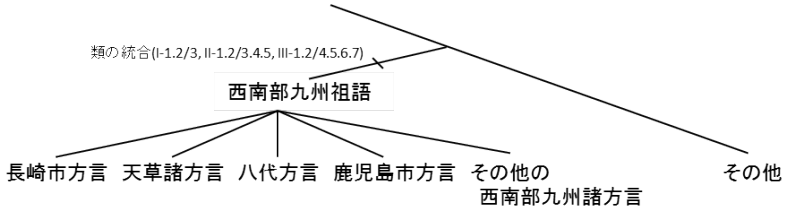

図 1：類の統合に基づいて仮定される単系統群（西南部九州諸方言）.

徳川（1962）は，この問題を解決するために諸方言の地理的分布を利用している。実際に，このような言語地理学的手法は，系統関係を論じる際に，競合する 2 つ以上の仮説の優劣を論じる際に援用されることがある（Sagart 2005）。しかしながら，地理的分布からの証拠は，系統関係の確立に補助的な役割を演じることはあっても，決定的証拠になりえない。前述のように，系統分類は共通の改新に基づいて行われるべきであり（Atkinson & Gray 2005; Pellard 2009），地理的分布は系統分類の基準にはなりえない。（言語地理学と比較言語学に関する日本語学内での論争は金田一 1973; 徳川 1974 を参照。）

以上のように，類の統合を共有する方言群の下位系統（すなわち系統樹における西南部九州祖語以下の樹形）を確立するためには，別の証拠が必要とされる。そのような証拠の 1 つとして広く利用されてきたものは，アクセント型の変化（HLL > LHL など，アクセント型の具体的な実現形の変化）という改新である。しかしながら以下に論じるように，アクセント型の変化に基づく系統論にも問題がないわけではない。

2.4. アクセント型の変化に基づく系統論の問題点

アクセント型の変化に基づく系統分類は，主として現代の諸方言におけるアクセント型を比較して，より古い段階の型と，そこからの変化を再建するという手法を用いる（奥村 1978; 木部 2000; 崎村 2006; 上野 2006）。これは，比較言語学における比較再建の手法に他ならない。

一般的に，系統関係のある 2 言語において，一方に A という形式が，他方に B という形式が観察される場合，3 種類の仮説が提案できる。すなわち，1) 祖型として*A を，変化として A* > B を再建するという仮説，2) 祖型として*B を，変化として B* > A を再建するという仮説，3) 祖型として*C を，変化として C* > A と C* > B を再建するという仮説である。これらの競合する仮説の優劣を論じる際に利用される主要な原理のひとつは，自然性（naturalness）である。すなわち，一般音声学的な考察と，世界の言語の音変化に関する知見に基づいて導き出される，変化の方向性に関する原理である（Campbell 1998）。諸言語

に頻繁に生じる変化は，通常一方向（A > B）に進み，その逆の方向（B > A）に進むことは普通は（時には決して）ない（Campbell 1998）。奥村（1978）はこの特性を「アクセントの内的変化の一般的傾向」と呼んでいる。

自然性の原理は，祖型の再建に関して想定しうる無数の論理的可能性を制限する役割を果たす点で重要である。特に上の例において*A でもなく*B でもなく*C を仮定する場合は，*C に想定される音形は論理的には無数に存在するので，自然性の原理は特別な重要性を持つ。

奥村（1978）は，2 拍名詞のアクセント型の改新に基づくことによって，九州諸方言の系統関係を論じている。ここで奥村は 19 の九州諸方言（そのうち 12 が西南部九州諸方言）と 6 の非九州諸方言，計 25 方言の系統関係を論じている。奥村の提案する系統樹（に類するもの）では，50 を超えるアクセント型の改新が仮定されている。ここで，奥村が仮定する音変化を詳細に検討してみると，自然性の原理が必ずしも一貫した形で適用されているわけではないことがうかがえる。例えば，アクセント型 HL, HL-L（コンマの後は 1 拍の助詞付きのアクセント型，ハイフンは名詞と助詞の境界を表す）は，以下の 5 種類のアクセント型のいずれかへと変化しうる（4）。

(4)　奥村（1978）に仮定される HL, HL-L からの変化
- a. HL, HL-L > HL, HH-L
- b. HL, HL-L > LH, LH-L
- c. HL, HL-L > HL, LH-L
- d. HL, HL-L > HL, HM-L
- e. HL, HL-L > HH, HH-H

同様に，アクセント型 HL, HL-L へは(5)に示す 6 種類のアクセント型のいずれかから変化しうる。

(5)　奥村（1978）に仮定される HL, HL-L への変化
- a. HF, HH-L > HL, HL-L
- b. LL, LL-H > HL, HL-L
- c. LH, ML-H > HL, HL-L
- d. LH, LL-H > HL, HL-L
- e. HH, HH-L > HL, HL-L
- f. LH, LH-L > HL, HL-L

奥村（1978）は，変化に関する無数の論理的可能性を，自然性の原理に基づいて，5〜6 種類にまで減じているわけであるが，この数が十分に少ないものなのか，あるいは多すぎるものなのかは直ちに断定できない。しかしながら現実においては，何らかの要因によって，5〜6 種類の変化のうち 1 種類のみが特定の方言の特定の段階で生じるわけであるから，その要因を特定できなければ，いかなる仮説も十分に説得力を持たない。

また奥村（1978）の枠組みには，双方向的変化が 3 種類認められていることが指摘できる（6）。ここで「双方向的変化を認める」とは，A > B の変化と B > A の変化の双方を認めるということである。前述の通り，自然性の原理によれば，変化は普通一方向に進むので，双方向的変化はこの原理に明らかに反していることになる。

(6)　奥村（1978）に仮定される双方向的変化

a.	HL, HL-L > LH, LH-L	LH, LH-L > HL, HL-L
b.	LH, LH-L > LH, LL-H	LH, LL-H > LH, LH-L
c.	HL, LH-L > LH, LH-L	LH, LH-L > HL, LH-L

奥村（1978）は，音変化は基本的に一方向的であり逆方向への変化は稀であるとしたうえで，逆方向の変化もないわけではないと譲歩している。いずれにせよ，双方向的な変化を認めるのであれば，自然性の原理と競合する別の原理を十分に明示的な形で示す必要がある。

多くの先行研究における変化の自然性に関する議論には，以下の問題点も指摘することができる。すなわち，自然性の原理に従うとされる変化に，十分な音声学的な裏付けが必ずしも認められないという点である。例えば，LLH > HLL の変化は，日本語の諸方言に関して標準的に想定される変化であるが（川上蓁 1965; 金田一 1973; 奥村 1978），de Boer (2010)などはこのような変化は世界の言語には頻繁に観察されるものではなく，したがって自然性に反するものであると主張している（このことに関する最近の議論は平子(2012)参照）。アクセント変化の自然性は，調音，音響，聴覚面からの実験的研究（例えば Sugito 2003 による喉頭筋電図的研究など）からの知見や，世界の言語における音調の変化に関する知見に基づいて，さらに検証する余地があると思われるが，現時点ではそれが十分になされているとは必ずしも言えない。

2.5. 新しいアプローチ：アクセント型の個別的変化に基づく系統論

ここで新しいアプローチを提案しよう。それはアクセント型の個別的変化と

いう改新に基づくアプローチである。

前述の通り，アクセント型の変化の大部分は，同一の環境にある同一の音はすべて同一の変化を被るという規則的な音変化の結果である。しかしながら，アクセント型の変化には規則的な音変化に従っていないものがある。たとえば，2 拍 5 類に属する語は，(3)に示した類別語彙からの予測に従えば，西南部九州諸方言で B 型で実現されるはずである。しかしながら，今回の天草諸方言の調査で対象となった 2 拍 5 類の語のうち「窓」のみが，すべての話者において，予測に反する A 型で実現される（第 4 節参照）。天草諸方言の「窓」には例外的な変化が生じているわけであるが，本稿ではこのような，規則的な音変化に従わない不規則かつ例外的な変化を「個別的変化」と呼ぶことにする。

個別的変化を生じさせる要因には様々なものがあると考えられる。そのうちの 1 つは上野(2002)の「群化」であろう。群化とは，同一の意味領域を共有する語群が同一の音形を持つようになる働きのことであり，たとえば東京方言では動物名や人名，疑問詞が頭高型（HL 型）に変化する過程が観察される。このように，アクセント型の個別的変化の背景には，ある程度一般的な原理が観察されることが知られている。その一方で，個別的変化には偶発的と言わざるを得ないものもある可能性がある。「窓」は偶発的な個別的変化の事例の 1 つかもしれない。

いずれにせよ，アクセント型の個別的変化は，通時的に生じた改新に他ならず，したがって系統分類に利用することができる。前述の「窓」における個別的変化は，調査対象となった天草諸方言のすべてが共有している。この共通改新に基づいて，天草諸方言は，この改新を共有していない方言群から分岐したという可能性を指摘することができるようになる。また，「窓」における個別的変化が平行進化でないことを独立の証拠を持って示すことができるのであれば，調査対象となった天草諸方言は，この改新によって単系統群をなす（「天草祖語」ともいうべき共通祖語に遡る）という可能性を指摘することができるようになる（図 2）。

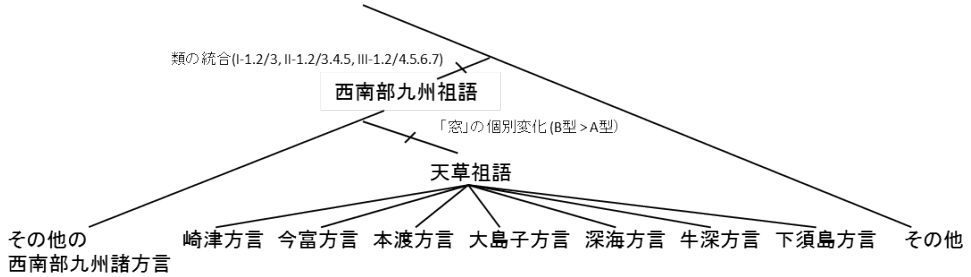

図 2：「窓」の個別的変化に基づいて仮定される単系統群（天草諸方言）.

アクセント型の個別的変化が系統分類に利用できる可能性は，これまでも散発的に指摘されてきた。例えば木部（2000: 318）は，鹿児島方言と枕崎方言において，類別語彙との対応からB型が予想される「赤」（2拍5類），「昨日」（3拍4類）などがA型で実現され，同じくA型が予想される「何処」（2拍1類），「胡麻」（2拍1類），「虹」（2拍2類）などがB型で実現される事実を指摘し，この例外の共有に基づいて，両方言の間の系統関係が近いことを示唆している。ただし，木部の挙げる例外的対応のすべてが個別的変化の結果とは限らない。少なくとも「胡麻」は3.4に述べるように「去声始まり」の語であり，この語がA型ではなくB型で実現される事実は，改新ではなくむしろ保持とみなされるべきであろう[3]。しかしながら一部の語（「昨日」や「何処」）のアクセント型は恐らく個別的変化の結果であり，したがって，木部はアクセント型の個別的変化が系統分類に関わることを示唆しているということができる。

また松森（1997）は，讃岐地方とその周辺の方言に，アクセント型の不規則な対応が観察されることを指摘している。これらの方言では，3拍5類に属する語の約半数（「油」等）があるアクセント型で，残りの語（「朝日」等）が別のアクセント型で現れる。この事実は，一見音韻的に条件づけられた分裂（すなわち規則的な音変化）の結果であるように思われるが，松森が指摘するように，その条件は特定することができない。音変化はその定義上，規則的で例外のないものなので，讃岐地方の諸方言に観察される不規則な対応は，標準的な比較言語学の枠組みを用いるならば，規則的な音変化の結果とみなすことはできない。

3拍5類におけるこの不規則な対応は，様々に解釈することが可能であろう。上野（2006）はこれを，日本語諸方言の共通祖語に遡る区別の保持の結果とみなす。それに対して松森（1997）は，讃岐地方周辺の諸方言に生じた改新とみなす。そして松森（1997）はこの改新に基づき，讃岐地方とその周辺の諸方言の系統分類を提案している[4]。

---

[3] これらの語のうち，「赤」「昨日」「胡麻」「虹」における不規則な対応は，我々が利用可能な資料に基づく限り，鹿児島方言と枕崎方言だけでなく，ほとんどの西南部九州諸方言が共有している。「昨日」「胡麻」「虹」に関しては本文参照。

[4] 松森はこの改新を，比較言語学の標準的な理論ではなく，語彙拡散理論（lexical diffusion, Wang 1977）を用いて説明を試みている。語彙拡散理論は，音変化に不規則性を認める理論であるので，音変化は定義上規則的であるとする我々の枠組みとは両立しない。語彙拡散理論の枠組みを適用する限り，（規則的な）音変化に従わないアクセント型の変化である個別的変化を定義することが困難となるだろう。

このように，アクセントの個別的変化が系統分類に利用できる可能性は先行研究においても示唆されてきたが，その可能性はこれまで十分に探求されてこなかった。

2.6. 平行進化と伝播

以上のように,アクセント型の個別的変化は系統分類に有用と考えられるが，すべての個別的変化が同様に有用であるわけではない。個別的変化を利用する際に特に重要となるのは，ある個別的変化が平行進化であるか否か，そして伝播の結果であるか否かの判断である。

先述の通り平行進化とは，系統の異なる言語群に同様の変化が生じることである。もしある変化（改新）が平行的進化であるならば，その改新のみに基づいて，任意の単系統群を仮定することはできない。反対に，もしある変化が，系統発生の過程で 1 度しか生じないものであるのならば（つまり平行進化でないのならば），その改新に基づいて単系統群を仮定することができる。したがって，有用性の高い個別的変化とは，偶然性の高い変化ということになる。

あるアクセント型の個別的変化が，先述の「群化」（上野 2002）のような比較的一般性のある原理によって説明可能であるならば，その個別的変化が系統論に対して持つ有用性は必ずしも大きくないということになる。なぜならば，一般性を有する原理によってもたらされた変化は，系統の違いを超えて平行的に生じる可能性が高いからである。上野（2002）によると，従来アクセント型の対立があった同語音語（同一の分節音列からなる語）は，群化の作用によって，アクセント型の対立が消失する傾向があり，例えば東京方言では「帆」（1 拍 1 類）と「穂」（1 拍 3 類）が同一のアクセント型を有するという。同様の変化は鹿児島方言でも起きており，「帆」と「穂」は同じアクセント型を有する（平山(編) 1960; 平山(編) 1992-1993）。これは明らかに平行進化であり，この改新の共有にのみ基づいて，東京方言と鹿児島方言が単系統群を構成すると主張することはできない。もちろんこの改新は，鹿児島方言が他の諸方言から分岐した証拠になるので，系統分類において一定の有用性を持つ。しかしながら，この種の改新は，改新の共有のみに基づいて単系統群を必ずしも仮定できない点で，平行的進化でない改新と比較してその有用性は低い。

伝播に関する議論に移ろう。ある個別的変化が諸方言に共有される事実は，伝播の結果として説明される可能性もある。言語接触によりアクセント型の対応に不規則性が生じる可能性があることはこれまでも指摘されてきた（平山 1951）。このような要因によるアクセント型の変化は，日本語学の文献で「アクセントの外的変化」と呼ばれる（奥村 1978）。よく知られたように，伝播に

よる言語変化は系統の違いを超えて生じうる（Atkinson & Gray 2005; Sagart 2005）。したがって，ある方言群が，伝播に起因するアクセント型の個別的変化を共有している事実にのみ基づいて，それらが単系統群をなすとみなすことはできない。伝播の可能性を排除するには，十分な資料に基づいた緻密な議論が必要である。

しかしながら，伝播に起因する言語変化が，系統研究にとって意味を持たないわけではない。借用語（これも伝播の産物である）の音対応を検討することが，通時変化の過程，とくに変化の相対年代（relative chronology）の解明に貢献しうることはすでによく知られている（Campbell 1998; ペラール 2013）。ただしアクセントに関しても同様の考察が行えるかは今後の研究を待たなければならない。

2.7. 本稿における個別的変化の利用

そこで本稿では，第 1 に，類別語彙表を用いた調査を行うことによって，天草諸方言が他の西南部九州諸方言と類の統合を共有しているか否かを確認する。第 2 に，類別語彙の予測に反するアクセント型を示す（個別的変化を見せる）語に注目し，そのような語のアクセント型を他の西南部九州諸方言におけるアクセント型と比較することによって，天草諸方言が西南部九州諸方言の中にどのように系統的に位置づけられるかを検討する。2.1 で指摘したように，我々が現時点で入手可能な資料の範囲内では，系統分類に関する強い主張をすることはできない。とはいえ，我々が新たに提案するアプローチの有効性を検証するための予備分析として，以降で行う系統分析は意義を持つと言うことができるだろう。

3. 分析手法

3.1. 概要

我々による天草諸方言の調査は 2013 年 9 月に行われた。調査項目には様々なものが含まれていたが，本稿では，アクセントの通時的研究のために用意された項目の調査結果のみを報告する。

3.2. 調査地点

調査地点は，崎津，今富，本渡，大島子，深海，牛深，下須島の 7 地点であった。その位置関係を把握するために図 3 に地図を示す。

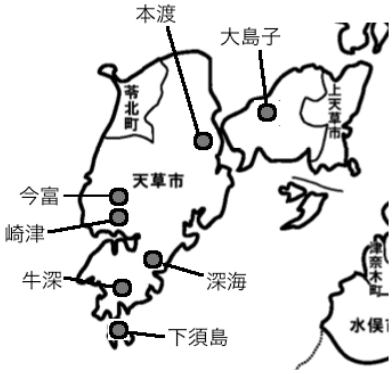

図 3: 調査地点を含む地図.

3.3. 話者

話者は 9 名であった。出身地と性別，生年を(7)に示す。

(7) 話者情報（出身地の後にあるアルファベットは話者の ID）
- a. 崎津 CF，女性，1931 年
- b. 今富 FK，男性，1929 年
- c. 今富 SY，女性，1937 年
- d. 本渡 IT，男性，1941 年
- e. 大島子 MK，男性，1937 年
- f. 深海 MD，男性，1944 年
- g. 深海 ST，男性，1949 年
- h. 牛深 HN，男性，1938 年
- i. 下須島 SY，男性，1936 年

3.4. 調査語

調査票は 1 拍から 3 拍の名詞 115 語からなる（表 1 参照）。内訳は 1 拍名詞が 14 語，2 拍名詞が 52 語，3 拍名詞が 49 語である。これらの調査語を，調査者があらかじめ用意したフレーム文に挿入し，その文を被験者に読み上げてもらった。フレーム文は，調査語単独の形（フレーム文無し）と，調査語＋1 拍助詞＋述語というものであった。調査語の語形は共通語と同じものとした。いわゆる俚言形の組織的な調査は行わなかった。

調査語を選別する際に用いた基準は 2 つである。1 つ目は，類別語彙表の各類を網羅する（各類から少なくとも 2 語以上選択する）というものである。利用した類別語彙表は，上野善道作成の私家版『アクセント調査語彙(B)』（収録

語彙は上野（1985）参照）である。ただし「骨」は金田一（1974）にしたがって 2 拍 3 類とした。この類別語彙表には「x 類」という類があるが，これは諸方言の型の対応が不規則であるものである。

2 つ目の基準は，「去声始まり」の語をできるだけ多く含めるというものである。去声始まりの語とは，『類聚名義抄』に代表される平安時代アクセント資料において，語頭拍を表わす字に去声点が差される（ことがある）語のことで，去声点が差された拍の音調は上昇調（R）と再建されるのが一般的である。調査語に含まれる去声始まりの語は(8)に示す 7 語である[5]。

(8) 去声始まりの調査語
巣（1 拍 x 類），歯（1 拍 x 類），百合（2 拍 1 類），胡麻（2 拍 1 類），蛇（2 拍 5 類），先ず（類なし），若し（類なし）

去声始まりの語は，方言間で特徴的な対応を示すことが知られている。5.2 に詳述するように，西南部九州諸方言では，去声始まりの語は B 型に対応すると主張されることがある（上野 2006）。

3.5. アクセント型の判定

アクセント型の判定は，聴覚印象および基本周波数曲線の視認に基づいて行った。天草諸方言の A 型は文節内に急激なピッチ下降を伴い，B 型はそのような下降を伴わない。先行研究によると，A 型の下降開始点であるピークが文節のどこに現れるかに関して方言差が観察されるという。また同一の方言内でも，（少なくとも一部の方言では）ピーク位置に変動が見られるという（例えば藤原(1991)による大江方言の記述）。我々の調査でも，一部の方言（深海方言，牛深方言，下須島方言）にはピーク位置の変動（第 3 拍以降にピークが現れる）が観察された。

いずれにせよ，我々の調査した天草諸方言はすべて，A 型は急激な下降を必ず伴い，B 型はそのような下降が観察されないという点で共通している。図 4 は今富方言のアクセント型の音声実現の例である。A 型のピークはいずれの場合においても第 2 拍区間に出現している。聴覚印象に基づいた観察では，ピー

---

[5] 調査票作成時にはもう 1 つの基準があった。それは，琉球語諸方言に同源語が見つかるものを優先的に選択するというものである。この基準を設けた理由は，西南部九州諸方言と琉球語諸方言との関連を調査することを当初の調査目的のひとつとしていたことにあった。しかしながら調査の結果，特筆すべき関連性は結果的に見つからなかった。したがって本稿では琉球語諸方言との関連については論じられない。

クは 2 拍文節では第 1 拍に，それ以外では第 2 拍に知覚される傾向がある。それに対して，B 型には急激な下降は認められない。本調査では文節内に急激な下降が観察されるものを A 型, そのような下降が観察されないものを B 型と判定した。

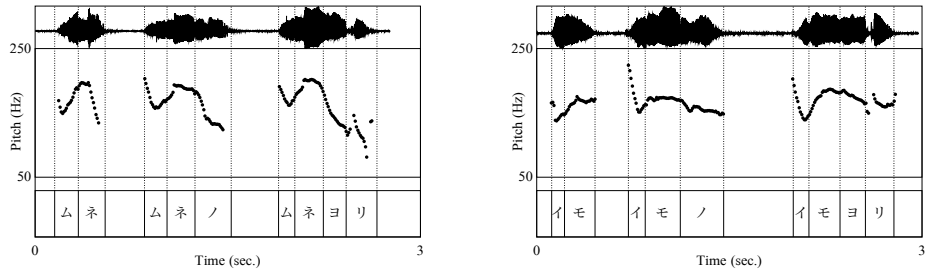

図 4 : 今富方言におけるアクセント型の音声実現（音声波形と基本周波数曲線）．A型「胸, 胸の，胸より」（左），B 型「芋，芋の，芋より」。

3.6. アクセント型の個人差の表現と「代表型」の定義

同一の語のアクセント型が，すべての話者を通じて一致するとは限らない。つまり，アクセント型には個人差が観察される。個人差の一部は方言差を表すものである可能性があるが，今回の調査では一地点につき最大 2 名の話者しかいないので，観察される変異が，個人差によるものであるのか方言差によるものであるのかを判断することは困難となる。今回は，同一の語のアクセント型に個人差が観察された場合，多数決の原理を適用して，全 9 名の話者のうち最低でも 5 人の話者によって発話されたアクセント型を, 天草諸方言の「代表型」と定義する。たとえば，「鞠」は 6 名の話者が B 型で，3 名の話者が A 型で発話したが，この語の代表型は多数決の原理により B 型と定義される。

このような方法は，天草諸方言におけるアクセント型の対応に関する知識を概括するためには有効である一方で，観察された個人差（ないし方言差）が今後の研究に示唆を与える可能性を，先験的に排除してしまう危険性を持つという欠点がある。この潜在的な問題点を解消することを目的として，第 1 にすべての語に関してすべての話者のアクセント型を報告するとともに，代表型を報告する際に，代表型とともにアクセント型の「話者間一致率」を報告する。話者間一致率は，代表型で発話した話者数が全話者数に占める割合を百分率で表したものである。前述の「鞠」（代表型=B 型）の場合は 67%（6÷9×100≒67）となる。

3.7. 他の九州諸方言との比較

天草諸方言の資料を他の九州諸方言と比較することを目的として，我々が用いたアクセントの資料体は『日本語諸方言アクセントデータベース（2014 年 3 月 18 日版）』（五十嵐・平子・荒河 2014）である。これは，九州諸方言を中心としたアクセントの非公開電子資料であり，以下の 3 種類の資料体から構成される。1 つ目は，五十嵐陽介（広島大学），平子達也（京都大学），荒河翼（広島大学）によるフィールドワークによって構築された資料体であり，大分県杵築方言，島根県出雲市大社方言，鹿児島県種子島伊関方言，同種子島西之表市街地方言の資料から構成される[6]。2 つ目は『現代日本語方言大辞典』（平山(編)1992-1993）に記載された諸方言の資料から，大分県大野郡野津町方言，福岡県福岡市方言，佐賀県杵島郡北方町方言，長崎県長崎市方言，熊本県八代方言，鹿児島県鹿児島市方言，同甑島下甑方言の資料を抽出したものである。3 つ目は『全国アクセント辞典』（平山(編)1960）から鹿児島県鹿児島市方言の資料を抽出したものである。いずれも類別語彙表に含まれる語を中心に構成されている。

4. 結果

それぞれの話者によって発話されたアクセント型は表 1 に報告する。ここでは代表型を検討する。

1 拍名詞のアクセント型（代表型）は（9）のとおりである。以下，括弧内に話者間一致率（%）を示す。

(9)　1 拍名詞

a. 第 1 類
　A 型：緒(100)，血(100)，帆(100)

b. 第 2 類
　A 型：名(100)，葉(100)，日(89)

c. 第 3 類
　B 型：手(100)，田(89)，酢(78)，荷(78)，湯(78)，根(56)

d. 第 x 類
　B 型：歯(100)，巣(89)

---

[6] 大分県杵築方言のアクセント資料の一部は平子・五十嵐（2013）に報告されている。種子島の 2 方言の資料は荒河翼氏の修士論文（広島大学）に掲載予定である。

1 拍名詞は一貫した「I-1.2 (A) /3 (B)」という統合を示す。第 x 類の「歯」と「巣」は双方とも B 型で実現されるが，これらはいずれも去声始まりの語である。このことは第 5 節に後述する。

2 拍名詞のアクセント型（代表型）は(10)のとおりである。

(10) 2 拍名詞

a. 第 1 類
   A 型：飴(100)，牛(100)，口(100)，酒(100)，水(100)，百合(100)，風(89)
   B 型：胡麻(89)

b. 第 2 類
   A 型：石(100)，歌(100)，音(100)，人(100)，紙(89)，橋(78) ，虹(56)

c. 第 3 類
   B 型：網(100)，瓶(100)，草(100)，脛(100)，角(100)，波(100)，蚤(100)，骨(100)，山(100)，花(89)，浜(78)，鞠(67)

d. 第 4 類
   B 型：息(100)，瓜(100)，種(100)，中(100)，針(100)，舟(100)，糸(89)，臼(89)，肩(89)，麦(89)，板(78)，汁(78)

e. 第 5 類
   A 型：窓(100)
   B 型：雨(100)，蔭(100)，声(100)，鍋(100)，蛇(100)，桶(89)，琴(89)，猿(89)，蛭(67)，腿(67)

f. 類無し
   A 型：先ず(100)，若し(100)

2 語を例外として，「II-1.2 (A) /3.4.5 (B)」という類の統合を示す。例外は「胡麻」と「窓」であるが，「胡麻」は去声始まりの語である。なお「百合」も去声始まりであるが，類別語彙の予測どおり A 型で実現される。類のない「先ず」と「若し」は A 型で実現されるが，これらも去声始まりの語である。

「虹」は多数決の原理によって A 型と定義されるが，アクセント型の話者間一致率は 56%（9 名中 5 名が A 型）であり，1 拍名詞「根」と並んで，全調査語の中で最も低い。「胡麻」，「窓」，「先ず」，「若し」，「百合」，「虹」については第 5 節で詳述する。

3 拍名詞のアクセント型（代表型）は(11)のとおりである。

(11)　3 拍名詞

a. 第 1 類

A 型：踊り(100)，飾り(100)，煙(100)，今年(100)，港(100)，麹(89)

b. 第 2 類

A 型：小豆(100)，二つ(100)，二人(100)，三つ(100)，六つ(89)，四つ(89)

c. 第 4 類

A 型：昨日(100)

B 型：五日(100)，鏡(100)，刀(100)，境(100)，宝(100)，鋏(100)，光(100)，扇(89)，言葉(89)，暦(89)，衾(89)，軍(67)，

d. 第 5 類

A 型：心(100)

B 型：油(100)，従兄弟(100)，親子(100)，簾(100)，襷(100)，情け(100)，柱(100)，箒(100)，枕(100)，五つ(89)，命(89)

e. 第 6 類

B 型：狐(100)，虱(100)，鼠(100)，裸(100)，左(89)

f. 第 7 類

B 型：鯨(100)，盥(100)，薬(89)，一つ(89)

g. 第 x 類

A 型：小麦(100)

B 型：泉(100)，烏(100)

「昨日」と「心」の 2 語を例外として，「III-1.2(A)/4.5.6.7(B)」という類の統合を示す。「昨日」と「心」については第 5 節で詳述する。

表 1a : 被験者別にみた 1 拍名詞のアクセント型. 網掛けは代表型と異なるアクセント型を表す。

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
1		緒		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
2	第 1 類	血		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
3		帆		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
4		名		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
5	第 2 類	葉		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
6		日		A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
7	第 3 類	酢		B	B	B	A	B	B	B	B	A	B
8		田		B	B	B	A	B	B	B	B	B	B

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
9		手		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
10		荷		B	B	B	B	B	A	B	B	B	A
11		根		B	B	B	B	A	B	A	A	B	A
12		湯		B	B	B	B	B	B	B	B	A	A
13	第 x 類	巣	去声	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
14		歯	去声	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B

表 1b：被験者別にみた 2 拍名詞のアクセント型．網掛けは代表型と異なるアクセント型を表す。類別語彙の予測に反する代表型は太枠で示す。

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
15		飴		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
16		牛		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
17		風		A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
18	第 1 類	口		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
19		酒		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
20		水		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
21		百合	去声	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
22		胡麻	去声	B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
23		石		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
24		歌		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
25		音		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
26	第 2 類	紙		A	A	A	A	A	A	B	A	A	A
27		虹		A	A	A	A	B	B	B	B	A	A
28		橋		A	A	A	A	A	A	B	A	B	A
29		人		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
30		網		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
31		瓶		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
32		草		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
33		脛		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
34		角		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
35	第 3 類	波		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
36		蚤		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
37		花		B	B	B	B	B	A	B	B	B	B
38		浜		B	B	A	A	B	B	B	B	B	B
39		骨		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
40		鞠		B	B	A	B	B	B	B	A	A	B
41		山		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
42		息		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
43	第 4 類	板		B	B	B	B	B	B	B	B	A	A
44		糸		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
45		臼		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
46		瓜		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
47		肩		B	B	B	B	B	B	A	B	B	B
48		汁		B	B	B	B	B	B	B	A	A	B
49		種		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
50		中		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
51		針		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
52		舟		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
53		麦		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
54		窓		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
55		雨		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
56		桶		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
57		蔭		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
58		声		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
59	第5類	琴		B	B	B	B	B	B	B	A	B	B
60		猿		B	B	B	B	B	B	B	A	B	B
61		鍋		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
62		蛭		B	B	A	B	B	B	A	A	B	B
63		蛇	去声	B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
64		腿		B	B	A	B	B	B	B	B	A	A
65	類無し	先ず	去声	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
66		若し	去声	A	A	A	A	A	A	A	A	A	A

表 1c : 被験者別にみた 3 拍名詞のアクセント型. 網掛けは代表型と異なるアクセント型を表す。類別語彙の予測に反する代表型は太枠で示す。

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
67		踊り		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
68		飾り		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
69	第1類	煙		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
70		麹		A	A	A	A	A	A	A	A	B	A
71		今年		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
72		港		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
73		小豆		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
74		二つ		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
75	第2類	二人		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
76		三つ		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
77		六つ		A	A	A	A	A	A	A	A	B	A

語番号	類	語	備考	代表型	崎津 CF	今富 FK	今富 SY	本渡 IT	大島子 MK	深海 MD	深海 ST	牛深 HN	下須島 SY
78		四つ		A	A	A	A	A	A	A	A	B	A
79		昨日		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
80		軍		B	B	A	B	B	B	B	A	B	A
81		五日		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
82		扇		B	B	B	B	B	B	B	A	B	B
83		鏡		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
84		刀		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
85	第4類	言葉		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
86		暦		B	B	A	B	B	B	B	B	B	B
87		境		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
88		宝		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
89		鋏		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
90		光		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
91		衾		B	B	B	B	B	B	A	B	B	B
92		心		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
93		油		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
94		五つ		B	B	B	B	B	B	A	B	B	B
95		従兄弟		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
96		命		B	B	A	B	B	B	B	B	B	B
97	第5類	親子		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
98		簾		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
99		襷		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
100		情け		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
101		柱		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
102		箒		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
103		枕		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
104		狐		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
105		虱		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
106	第6類	鼠		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
107		裸		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
108		左		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
109		鯨		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
110	第7類	薬		B	B	A	B	B	B	B	B	B	B
111		盥		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
112		一つ		B	B	B	B	B	B	B	B	B	A
113		小麦		A	A	A	A	A	A	A	A	A	A
114	第x類	泉		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B
115		烏		B	B	B	B	B	B	B	B	B	B

5. 考察：天草諸方言の系統的位置づけ

5.1. 例外的な対応を示す語

天草諸方言における類の統合は，若干の例外はあるが，他の西南部九州諸方

言と同様に，(3)のようなパタンを示すことが確認された。したがって，天草諸方言は，他の西南部九州諸方言と，規則的な音変化に起因する類の統合という改新を共有していると結論することができる。定説通り，天草諸方言は，他の西南部九州諸方言とともに，単系統群を構成することが確認されたとみてよいだろう。ここでは，我々が第 2 節で提案した新しいアプローチを用いて，西南部九州諸方言における天草諸方言の系統的位置を検討する。

類別語彙の予測に反する割合が比較的高い語は(12)に挙げる 5 語であった。

(12) 類別語彙の予測に反する語
去声始まりの語：胡麻（2 拍 1 類）
その他の語：虹（2 拍 2 類），窓（2 拍 5 類），昨日（3 拍 4 類），心（3 拍 5 類）

以下では去声始まりの語とそうでない語を別々に考察する。

5.2. 去声始まりの語

まず，去声始まりの語について検討しよう。(13)に示すように，去声始まりの語は，A 型で実現されるものと B 型で実現されるものがある。

(13) 去声始まりの語の対応（類別語彙の予測に反するものに下線）
a. A 型：百合（2 拍 1 類），先ず（類なし），若し（類なし）
b. B 型：巣（1 拍 x 類），歯（1 拍 x 類），<u>胡麻（2 拍 1 類）</u>，蛇（2 拍 5 類）

去声始まりの語は，西南部九州諸方言で B 型に規則的に対応すると一般化されることがある（上野 2006）。そしてこの対応が，西南部九州諸方言の系統的位置づけに関して重視されることがある（上野 2006）。

たしかに「巣」「歯」「胡麻」「蛇」は B 型で実現されるが，「百合」と「先ず」と「若し」は，この一般化に反して A 型で実現される。実は，「百合」と「先ず」と「若し」が A 型で実現されるのは天草諸方言に限らない。表 2 に示すように，これらの語は鹿児島方言でも A 型で実現される。この事実はすでに知られており，上野（2006）は「百合」「先ず」「若し」等は「去声始まり：B 型」という対応の例外となることを指摘している。「先ず」「若し」に関しては, 西南部九州祖語の段階で, 特定の副詞が一様に A 型となる（群化による）個別的変化が生じたと考えることもできるが，「百合」はいずれにせよ例外と

なる。

その他の西南部九州方言を検討すると，去声始まりの語の対応はより複雑であることが分かる。種子島伊関方言では「若し」はA型であるが，「先ず」はB型である。一方，種子島西之表市街地方言では，「若し」も「先ず」もB型である。また，「歯」は種子島の2方言でA型であり，「蛇」は熊本県八代方言でA型である。

表 2: 西南部九州諸方言における去声始まりの語のアクセント型.「鹿児島 I」は平山(編)(1992-1993)からの資料，「鹿児島 II」は平山(編)(1960)からの資料（以下同様）。

	天草 代表型	佐賀県 杵島郡	長崎	熊本県 八代	鹿児島 I	鹿児島 II	甑島 下甑	種子島 伊関	種子島 西之表
百合（2拍1類）	A	A	A	A	A	A	A	A	A
先ず	A					A		B	B
若し	A					A		A	B
巣（1拍x類）	B	B	B		B	B	B	B	B
歯（1拍x類）	B	B	B		B	B	B	A	A
胡麻（2拍1類）	B	B	B	B	B	B	B	B	B
蛇（2拍5類）	B		B	A	B	B	B	B	B

以上のように，「西南部九州諸方言において，去声始まりの語はB型に規則的に対応する」という一般化には例外が少なからず認められる。去声始まりの語の西南部九州諸方言におけるアクセント型の対応を巡ってはさらなる調査が要される。また，去声始まりの語の対応に基づいて，西南部九州諸方言と京都方言・東京方言とが分岐する年代を推定する試みがあるが（上野 2006），この試みの評価も，西南部九州諸方言の資料のさらなる蓄積が行われない限り不可能だろう。

5.3. その他の語

次に去声始まりではない語について見ていく。まず，「窓」と「心」のアクセント型を検討しよう。「窓」（2拍5類）は，類別語彙の予測に反して，すべての天草諸方言でA型であった。表3に示すように，他の西南部九州諸方言ではこの語は一貫してB型で実現する。すでに2.5で触れたように，天草諸方言の「窓」がA型で実現される事実に基づいて，天草諸方言が単系統群をなすことを主張することも可能かもしれない（図5）。

「心」（3拍5類）もまた，類別語彙の予測に反して，すべての天草諸方言

においてA型で実現された。この語は, 表3に示すように, 佐賀県杵島郡方言, 長崎市方言でもA型で実現される。一方，その他の西南部九州諸方言では，類別語彙の予測どおり，B型で実現される。「心」がA型で実現されるという特徴を，天草諸方言，佐賀県杵島郡方言，長崎市方言が共有している事実に基づいて，これらの方言群が単系統群をなすことを主張できる可能性もある。ここで，分析対象のすべての方言において，「窓」がA型になる変化が生じている方言は例外なく「心」がA型になる変化が生じているが，逆は真ならずという含意関係（implicational relation）が認められることは注目に値する。この事実は, 変化の相対的年代（relative chronology）に関する示唆を与える。具体的には, 図5に示すように，「心」の個別的変化の後に「窓」の個別的変化が生じたことが示唆される。

表3：西南部九州諸方言における「窓」と「心」のアクセント型.

	天草 代表型	佐賀県 杵島郡	長崎	熊本県 八代	鹿児島 I	鹿児島 II	甑島 下甑	種子島 伊関	種子島 西之表
窓（2拍5類）	A	B	B	B	B	B	B	B	B
心（3拍5類）	A	A	A	B	B	B	B	B	B

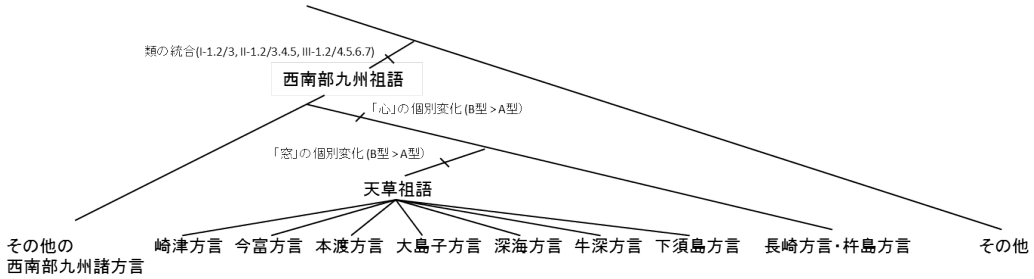

図 5：「心」の個別的変化に基づいて仮定される単系統群（長崎・杵島方言と天草諸方言）.

続いて「虹」のアクセント型を検討しよう。上野（2006）によると，この語のアクセント型は「議論の多い」(p. 36) ものであるという。前述のとおり「虹」は，5人の話者がA型で，4人の話者がB型で実現した。この語は2拍2類であるのでA型が予測されるが，表4に示すとおり，西南部九州諸方言ではB型で実現されることが比較的多いようである。熊本県八代方言ではA型であり，鹿児島市方言では平山(編)（1992-1993）によるとB型，平山(編)（1960）によるとA型である。木部（2000）によると，鹿児島市方言でも鹿児島県枕崎方言でもB型であるので，やはり西南部九州諸方言ではB型が主流のようである。「虹」は, 西南部九州祖語の段階ではB型であり, B型 ＞A型の個別的変化（お

そらく平行進化）がいくつかの西南部九州諸方言に生じたとみなすことができる可能性がある。この語がA型で実現された天草諸方言は，崎津方言，今富方言，牛深方言，下須島方言であった。これらはすべて天草市の最南部に位置する集落の方言である。この地理的分布が何らかの意味を持つのかを検討するのは今後の課題である。

表4：西南部九州諸方言における「虹」のアクセント型.

	天草 代表型	佐賀県 杵島郡	長崎	熊本県 八代	鹿児島 I	鹿児島 II	甑島 下甑	種子島 伊関	種子島 西之表
虹（2拍2類）	A	B	B	A	B	A	B	B	B

最後に「昨日」のアクセント型を検討しよう。この語は3拍4類であるのでB型が予測されるが，調査したすべての天草諸方言でA型となる。実は，表5に示すように，利用可能な資料に基づく限り，この語はすべての西南部九州諸方言でA型となる。

表5：西南部九州諸方言における「昨日」のアクセント型.

	天草 代表型	佐賀県 杵島郡	長崎	熊本県 八代	鹿児島 I	鹿児島 II	甑島 下甑	種子島 伊関	種子島 西之表
昨日（3拍4類）	A	A	A	A	A	A	A	A	A

もし「昨日」が3拍4類相当のB型ではなく，3拍1類・2類相当のA型で実現される事実が，この語に生じたアクセント型の個別的変化の結果であるならば，この改新はすべての西南部九州諸方言が共有していることになる。この共通改新に基づいて，西南部九州諸方言は単系統群をなすと主張できる可能性がある。

興味深いことに，九州の非西南部九州諸方言である大分県杵築方言，大分県大野郡方言でも同様に，「昨日」は類別語彙の予測に反するアクセント型で実現される。表6に示すように，これらの方言では，3拍4類に所属する名詞（「男」など）のアクセント型はLHH-L型であるが，「昨日」はLHH-L型ではなく，LHH-H型で実現される。後者の型は3拍1類（「鰯」等）あるいは3拍2類（「小豆」など）に所属する名詞の型と同一である。すなわち，「昨日」が3拍4類の型ではなく3拍1類・2類の型で実現されるという特徴を，西南部九州諸方言と，非西南部九州諸方言である大分県杵築方言，大分県大野郡方言とが共有していることになる。

表 6：非西南部九州諸方言における「昨日」のアクセント型.

	大分県 杵築	大分県 大野郡
昨日（3 拍 4 類）	LHH-H	LHH-H
鰯，港，畳など（3 拍 1 類）	LHH-H	LHH-H
小豆，娘，東など（3 拍 2 類）	LHH-H	LHH-H
男，頭，鋏など（3 拍 4 類）	LHH-L	LHH-L

もし「昨日」のアクセント型が類別語彙の予測に一貫して反する事実が，アクセント型の個別的変化の結果であるならば，この個別的変化という改新は，西南部九州諸方言だけでなく，その他の九州諸方言にも共有されていることになる。そしてもしこの改新が，第 1 に，他の日本語の方言に共有されていないのであれば（「昨日」が 3 拍 4 類とされていることが示唆するようにその可能性は高い），第 2 に平行進化でないことが明らかになれば，九州の諸方言は単系統群をなす（言わば「九州祖語」にさかのぼる）可能性を指摘することができるようになる。この仮説の検証にはさらなる調査が要される。その際には，「昨日」が 3 拍 4 類に属するという見解の妥当性を検討することに加えて，他の方言における「昨日」のアクセント型を網羅的に調査する必要がある。

6. 結論

本稿は，規則的な音変化に従わない例外的なアクセント型を示す語（個別的変化を見せる語）に着目して，日本語諸方言の系統関係を解明するという新しいアプローチを提案した。また，天草諸島の 7 地点で行ったアクセント調査の結果に基づいて，天草諸方言の名詞アクセント資料を提供した。さらにこの資料を，我々が提案したアプローチを用いて分析することによって，西南部九州諸方言における天草諸方言の系統的位置を検討した。

西南部九州諸方言のように，類の統合を共有している方言群の系統発生の過程を，アクセント体系に基づいて解明するためには，アクセント型の個別的変化は有用な資料となりうる。そのためには数多くの方言について包括的なアクセント資料が不可欠であるが，現在入手可能な資料は質・量ともに決して十分ではない。今回，天草諸方言に対して行った系統分析は，本稿の提案した新しいアプローチの有効性を検討することを目的とした予備分析に過ぎないこと，そして，系統分類に関して我々がここで示した仮説はいかなるものであれ，十分な証拠に基づくものではないことは，もう一度強調しなければならない。とはいえこの事実は，本稿が提案したアプローチの有効性を否定するものではな

い。今後は，大規模な資料の分析に立脚して，アクセント型の個別変化に基づいた系統研究の可能性を探求する必要がある。

謝辞

現地調査の際にお世話になった村上敬一氏（徳島大学）にお礼申し上げる。本稿は，JSPS 科研費（若手(B)）「アクセント体系と形態統語論における改新に基づいた九州諸方言の系統関係の解明」（課題番号 26770143，研究代表者：五十嵐陽介）の成果の一部である。

参考文献

秋山 正次 (1983)「熊本県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一(編)『講座方言学 9：九州地方の方言』, pp.207–235, 国書刊行会.

五十嵐 陽介・平子 達也・荒河 翼 （2014）『日本語諸方言アクセントデータベース（2014 年 3 月 18 日版）』（非公開電子データ）.

上野 善道 (1985)「村上方言の名詞のアクセント資料－1～3 モーラ語」『東京大学言語学論集』, 25–60.

上野 善道 (2002)「アクセント記述の方法」飛田良文・佐藤武義（編）『現代日本語講座 3：発音』, pp. 163–186, 明治書院.

上野 善道 (2006)「日本語アクセントの再建」『言語研究』130, 1–42.

上野 善道 (2012)「N 型アクセントとは何か」『音声研究』16(1),44–62.

奥村 三雄 (1978)「九州方言アクセントの系譜」『九州文化史研究所紀要』23, 55-79.

上村 孝二 (1971)「天草島方言のアクセント」『鹿児島大学法文学部紀要: 文学科論集』7，95–113.

川上 蓁（1965）「いわゆる低低低型から高高低型への変化」『音声学会会報』118（川上蓁(1995)『日本語アクセント論集』, pp. 434–441, 汲古書店に採録）.

木部 暢子（2000）『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版.

九州方言学会 (1969/1991)「熊本県深海方言」『九州方言の基礎的研究 改訂版』東京: 風間書房, pp.415–471.（本稿では 1991 年刊行の改訂版を使用）

金田一 春彦・和田 実 (1955)「国語アクセント類別語彙表」国語学会(編)『国語学辞典』東京堂出版.

金田一 春彦（1973）「比較方言学と方言地理学」『国語と国文学』179, 1–18（馬瀬良雄（1986）（編）『論集日本語研究 10 方言』有精堂に採録）.

金田一 春彦(1974)『国語アクセントの史的研究：原理と方法』塙書房.
崎村 弘文（2006）『琉球方言と九州方言の韻律論的研究』明治書院.
真田 信治(編) (2002)『消滅に瀕した方言文法の記録：天草方言・由利方言』科学研究費補助金(特定領域研究(A))研究成果報告書.
東条 操（1954）『日本方言学』吉川弘文館.
徳川 宗賢 (1962) 「“日本諸方言アクセントの系譜”試論―「類の統合」と「地理的分布」から見る―」『学習院大学国語国文学会誌』6（徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』, pp. 483－511, ひつじ書房に採録）.
徳川 宗賢（1974）「方言地理学と比較言語学」『学習院大学国語国文学会誌』17, 1–18 （徳川宗賢（1993）『方言地理学の展開』, pp. 57-83, ひつじ書房に採録）.
平子 達也 (2012)「ラムゼイ説と日本語アクセント史研究の諸問題：de Boer (2010)の書評」『音声研究』16(1), 16–29.
平子 達也・五十嵐 陽介 (2013)「大分県杵築市（八坂）方言のアクセントに関する一報告」第 251 回筑紫日本語研究会.
平山 輝男 (1951) 『九州方言音調の研究』学界之指針社.
平山 輝男(編) (1992-1993) 『現代日本語方言大辞典』第 1 巻-第 7 巻，明治書院.
平山 輝男(編) (1960)『全国アクセント辞典』東京堂出版.
藤原 与一 (1991)『昭和日本語の方言　第 7 巻　九州西側<筑前・肥後>三要地方言：福岡県桜井方言・熊本県白水村方言・熊本県天草大江方言』東京: 三弥井書店.
ペラール トマ (2013)「日琉祖語の分岐年代」国際ワークショップ「琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」（京都大学：2 月 19 日-20 日）.
松浦 年男 (2014)『長崎方言からみた語音調の構造』ひつじ書房.
松森 晶子（1997）「徳島県脇町・三加茂町のアクセントと本土祖語のアクセント体系」『国語学』189, 68–55 (15–28).
松森 晶子・新田 哲夫・木部 暢子・中井 幸比古 (2012)『日本語アクセント入門』三省堂.
Atkinson, Quentin D. & Russell D. Gray (2005) "Curious Parallels and Curious Connections—Phylogenetic Thinking in Biology and Historical Linguistics," *Systematic Biology* 54 (4), 513–526.
Bouckaert, R., Lemey, P., Dunn, M., Greenhill, S. J., Alekseyenko, A. V., Drummond, A. J., Gray, R. D., Suchard, M. A., & Atkinson, Q. D. (2012)

"Mapping the origins and expansion of the Indo-European language family," *Science* 337, 957–960.

Bryant, D., Filimon, F. and Gray, R. (2005) "Untangling our past: Languages, trees, splits and networks," In: R. Mace, C. Holden, S. Shennan (eds.) *The Evolution of Cultural Diversity: Phylogenetic Approaches*, pp. 69–85, CA, USA: Left Coast Press.

Campbell, Lyle (1998) *Historical Linguistic*, Edinburgh: Edinburgh University Press.

de Boer, Elisabeth M. (2010) *The Historical Development of Japanese Tone*, Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Gray, Russell D. and Quentin D. Atkinson (2003) "Language-tree divergence times support the Anatolian theory of Indo-European origin," *Nature* (426), 435–439.

Kubozono, Haruo (2012) "Varieties of pitch accent systems in Japanese, " *Lingua* 122, 1395–1414.

Lee, Sean & Toshikazu Hasegawa (2011) "Bayesian phylogenetic analysis supports an agricultural origin of Japonic languages," *Proceedings of the Royal Society, Biological Sciences* 278(1725), 3662–3669.

Osthoff, Harmann and Karl Brugmann (1878) *Morphologische Untersuchungen auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen*, Leipzig: S. Hirzel.

Pellard, Thomas (2009) Ogami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryukyu. Ph.D. dissertation, École des hautes études en sciences sociales.

Sagart, Laurent (2005) The higher phylogeny of Austronesian and the position of Tai-Kadai. *Oceanic Linguist* 43, 411–444.

Sugito, Miyoko (2003) Timing relationships between prosodic and segmental control in Osaka Japanese word accent, *Phonetica* 60, 1–16.

Wang, William S.-Y. (ed.) (1977) *The Lexicon in Phonological Change*, The Hague: Mouton.

Accent data of Amakusa dialects: An attempt for the phylogenetic analysis of the south-west Kyushu dialects

Yosuke Igarashi
Hiroshima University

Toshio Matsuura
Hokusei Gakuen University

This study is aimed at 1) to describe the accent of nouns in the Amakusa dialects of Japanese on the basis of our fieldwork study performed in seven villages in the Amakusa islands, Kumamoto Prefecture, Japan, 2) to propose a novel approach to the phylogenetic study of Japanese dialects based on their accent systems, and 3) by means of this approach, to investigate the phylogenetic position of the Amakusa dialects among the south-west Kyushu dialects. The results of our analysis revealed that *goma* 'sesame', *nizi* 'rainbow', *kinoo* 'yesterday', *kokoro* 'heart', and *mado* 'window" showed irregular accentual correspondences with other (non-Kyushu) Japanese dialects. The irregularity found in the former three nouns is shared by most of the south-west Kyushu dialects, whereas that in the last noun *mado* is shared only by the Amakusa dialects. On the basis of the results we proposed a tentative tree that indicates the phylogenetic position of the Amakusa dialects.

（初稿受理日：2014 年 3 月 30 日，最終稿受理日：2014 年 9 月 17 日）